

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
4月号
通巻644号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 300円
★年間購読料 3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



春の大倭拝殿周辺 井手 泉さん撮影

大倭会文化講演会報告(抄録)〈下〉

ゴリラに学んだ人間の本質について

令和5年11月12日 大倭拝殿にて

講師 山極壽一氏

総合地球環境学研究所のこと

実は、SDGs(持続可能な開発目標)には抜けているものがあります。人間が生きる上で不可欠なもので、それは文化です。

なぜ文化が目標にならないかというと、数値化されないからです。文化というのは人間の体や心に埋め込まれた価値観なんですね。それが外に出たものは、生産物としてみんなの手元にある。だけど価値観そのものは数値化すらできない。それは人々が協働することによって現れるものなんですね。

私が今おります『総合地球環境学研究所』(以下、地球研)は、山尾三省さんが亡くなった2001年にできました。私が今、所長をやってますけれども、初代の所長は「地球環境問題の根幹は科学技術ではなくて、人間の文化の問題である」と言い切りました。つまり人間の持っている価値観の問題だということなんです。

また同じ年に、パリのユネスコ総会で「文化的多様性に関する世界宣言」が採択されました。第一条には「生物的多様性が自然にとって必要であるのと同様に、文化的多様性は、交流、革新、創造の源として、人類に必要なものである」と書いてある。文化というのは多様でなければいけない、個性的でなければいけないと言っているんです。

第七条には「創造は、文化的伝統の上

に成し遂げられるものであるが、同時に他の複数の文化との接触により、「開花するものである」と書いてある。

文化は個性的で多様でなければいけないけれど、他の文化と接触しなければ未来も開けない、創造性は育まれない、と書いてある。異文化と接することは個人にとっても重要です。

今、世界で起こりつつあることは、文化の無国籍化です。G A F Aと呼ばれる大手ICT(情報通信技術)企業4社が、世界中にプラットフォームを張り巡らして個人の情報を吸い上げ、同じ方向にみんなを誘導している。だから世界は一元化し、文化は無くなりつつある。

世界の価値観が一元化しているから、格差が広がっているわけです。これまでは文化を越えれば価値観が違った。富める・貧しいがあったとしても、他の文化では違うという変換ができた。けれども、もはやそれができなくなりつつある。貧しい人はずっと貧しい、富める人はずっと富めるということになってしまっている。これは価値の一元化なんです。だから世界中で貧しい国の人達が富める国へ移動を始めているわけで、そうであってはならないと思います。

「新たな社交」が求められている

近代まで我々は人間同士が信頼し合って社会を作ってきました。けれども今、人間同士バラバラになって制度やシステムにぶら下がっているんですね。例えばクレジットカード。そのカードを使って自分の権利を行使する場合、自動的に自分の口座からお金が引き落とされるという仕組みになっているわけですよ。そこには人間が介在しない。制度とシステムがあるだけです。

もし人間のネットワークで我々が信用社会を作っている時代だったら、自分の身近な人がたとえいなくなったとしても、その人が持っていたネットワークがまた自分の元にもたらされるわけだから、それは消えないです。だから回復力がある。けれども制度やシステムに頼っているばかりでは、制度やシステムが狂った時に何も無くなってしまふ。だって制度やシステムは人間じゃないんだから。そういうことが当たり前になっているのが現代です。

我々がずっと長い時代をかけて作り上げてきた3つの縁、血縁・地縁・社縁がどんどん希薄になっていきます。新型コロナウイルスによってさらにこれが希薄になっている。けれど人々は縁が無くては生きていけません。だから一時的な縁でも求めていこうと日本各地、世界各地で行われているイベントに一齐に殺到しているわけです。そこでスポーツを観戦しながら一齐にゲームを盛り上げ、たとえば阪神が優勝したらみんなが集まる。それによって一時的な縁が得られたと思って安心する。でもそういう縁は長続きしません。

本当に必要なのは「新たな社交」というものを作り上げて、その中でしっかりと人間の縁を作ることです。そういうことが求められているのではないかと思うんですね。

では社交とは何か。2年前に亡くなられた山崎正和さんが『社交する人間 ホモ・ソシアリス』(中公文庫)の中で、社交の定義をしています。

社交とは、「人間のあらゆる欲望を楽天的に充足しつつ、しかしその充足の方法のなかに仕掛け(礼儀作法)を設け、それによって満足を暴走から守ろうという試みである」。「社交のなかでは、人びとは互いに中間的な距離を保ち、いわば付かず離れずの関係を維持することが期待されている

」。「参加者はみずからの表情も発言も、内面の感情そのものもその起伏にあわせ、協力してリズムを盛りあげなければならない」。「作法は行動に複雑な手続きを設定し、正確にしかも自然らしくそれを踏んで行くことを要求する」と。

その後がよいんですね。

「行動の全体をまるで音楽のように一つの緊張感で貫き」と言っています。

我々は日々、社交の世界に生きており、そこで使われるのは音楽的なコミュニケーションなんです。言葉に依存しているとフェイクに騙され、ヘイトに悩まされる。言葉に依存し過ぎる今の環境というものを、もう少し緩やかに朗らかにしていく必要があって、それは音楽的なコミュニケーションを見直すことが大事だと思っています。

市場価値から使用価値へ

人間の社会はゴリラの社会と比べると、3つの自由によって拡大されてきたと思うんです。それは、移動する自由、集まる自由、対話する自由です。どれをとってもゴリラと比べると圧倒的に人間は幅が広い。これを忘れてはいけない。

今、第2のノマド時代を迎えつつあると思っています。新型コロナウイルスがだんだん弱くなると、一齐に世界中の人々が動き出す。動機はさまざまですが、動き出すことによってこの世界に変化が生まれる。食糧生産を始めて以来の定住と所有の原則の社会が崩れると思うんですね。

だって移動するのに物を持って歩けないじゃないですか。なるべく物を減らすでしょう。現地調達しますよね。現地調達するの一番コストが安いのはシェアをする、あるいは共有財にしてコストを下げる。そういうものが結果的に増えていく

のではないか。

逆説的だけれどもICTや情報通信機器が発達することで移動はたやすくなり、コストは下がります。その結果として我々は、この1万年近く続いてきた定住性を原則とした社会のくびきから逃れることが出来るようになるかもしれない。

そう考えなければいけないのは、我々が常に価値を固定化している市場価値から逃れて、使用価値へと離脱することです。我々は所有物によって価値を決めますよね。その価値はマーケットが決定する。規格も値段も決められています。でも生産者と消費者が直接その価値をやりとりすれば、市場価値に関係なく自分達で価値を決められる。例えばこれまで捨てられていた野菜が使われることで、自分達の価値になる。そういうことを実践すればいいんです。

私自身は瀬戸内海のある漁師さんと契約をして、毎月のように投資をしています。そうすると漁師さんは「山極に食べてもらいたいもの」を送ってくれます。私は品物を注文しているわけじゃなくて、彼に投資しているわけです。そうすると彼と自分との間に、物を通じて関係が生まれる。相手を思いやる心が生まれる。

今、我々が買っている物というのは、どれも私に買ってほしいと思っただけの物じゃありません。市場に出すために作られた物です。それが大きなマーケットによって消費欲も生産欲も左右されているというのは、どこかおかしい。

それを直接的に繋ぐことによって、物が人と人とを繋ぐ社会が、新たに立ち上がってくるんじゃないだろうか。それによって自律分散や社会関係資本を利用した、シェアとコモンズ（共有資源）を拡大できるような社会を再生できるのではないかと思います。

生命地域共同体という取り組み

今、地球研がやっていることは里山の再利用、里山の価値の再認識と再整備、分散型居住の推進と地域づくりなど関係性と循環を重視する取り組みです。まさに三省さんがおっしゃった「生命地域共同体」です。

しかし今、国土交通省は山間地域あるいは過疎地域の人達を集めて中間都市を作って、そこに設備を集約させようとしている。コスト削減のためですが、これは僕は逆だと思っています。

実は過疎地域こそ人々が自由に豊かに繋がりがあって生きられる地域なのではないか。その価値をもう一度再考しながら、過疎で不便ということをひっくり返し、そこでこそ人々は人間として生きられるような社会を作れるんだということをやろうと思っています。

そのためには、山、森、里、川、海という水の流れを「流域ガバナンス」としてもう一度再考しなければならぬんじゃないか。今、国土交通省は川の流れをコンクリート漬けにしてしまっ、早く雨水を海に流そうということにしています。そのせいで水の流れが運んでくれる山の恵み・森の恵みというものが、全然地域に落ちていかない。

そういうものをもう一度考え直しながら、土地の豊かさ、土壌の豊かさというのはどうやって作られてきたのかということ、土をいじる人達が考え直し、そこで生活を立て直すということをやっていくかなければならない。

それは一人では出来ません。いろいろな流域の人達がそれぞれの地域の自然を巧みに利用しながら、協力し合わなければならぬ。そういうことがこれから起こっていかば、我々が真の豊かさ、

人間の本质を理解しながら、他の生命とも共生しながら生きていくという暮らしが作れるのではないか。

最近『猿声人語』（青土社）という本を出しました。もはや天の声を聞く時代じゃない。猿の声を聞くと、そういう話でありましてゴリラから見るとそういう話になる。ぜひお手にと取っていただければ幸いです。（拍手）

◀講演する山極壽一氏



◀講師との関わりを話す屋久島在住の手塚賢全氏



◀熱心に傾聴する参加者



◀講演後の懇親会で古武術研究家の甲野善紀氏と



◀ゴリラの手と、相撲の手の話に花が咲く

文化講演会報告記事作成始末記

永仮あづみ

私は現在、介護施設で看護師として働く傍ら、骨のズレを優しい力で戻す施術「モルフオセラピー」の勉強をしている。以前、文化講演会で講演されたことのある医師・探検家の関野吉晴さんも、モルフオセラピー施術者の一人である。私は、関野さんの兄弟子に施術を習っている。そんな縁から「嫌われ者、鼻つまみ者、日陰者の生き物たちの復讐」をテーマとした研究者（ハエ、ダニ、糞虫、死出虫など）たちと関野さんとの対談を書き起こしする機会があった。

研究者たちの一人に山極壽一さんがいた。ゴリラの色気を放つ山極さんは格好良かった。文化行事で佐渡に行った際（2022年10月）、岸野さんにその話をすると、来年（2023年）の文化講演会は山極さんだという。旅先でのセッションの高さもあってか、自ら「書き起こしやります」と言ってしまった。

今年に入り原稿の締め切りが迫ってきたが、なかなか進まずにいた。そんな矢先にコロナに罹患。職場から10日間は来ないでくださいとのこと。幸い症状は軽く、5日で元気に。残りの5日、書き起こし作業に集中することが出来た。お忙しい山極さんに文章を確認してもらうため「短く」纏めると言われていたが、関野さんの文化講演会報告記事の印象もあり、『とおやまと』で4回にわたって連載）書き起こしそのものにこだわってしまった。ある程度出来てきた頃には文章を読み返すと、頭の中で山極さんの声が再生されるようだった。しかし「短く」纏めようにも、前説から締め言葉まで、削る箇所が私には見当たらない。「お後がよろしいようで」と言いたくなる面白さ。

全てが繋がっていて、講演の全体をまるでひとつの音楽のように緊張感で貫く。山極さんの声を音として聞き、文字として書き起こし理解を深める。最高の体験をさせてもらった。もうやりたくはないが（笑）。

「短く」が頭の片隅にあったものの「終わってー」という開放感と「これ以上はもう無理」という脱力感。あわよくばこのままでいけないか？ との思いもありつつ、経過報告として岸野さんにメールを送りつけた。すると即座に「よく出来ている。ネットですべて全文を読めるようにする」と岸野節で突っぱしってくれたのだが結果的には、それは叶わなかった。やっぱりダメだったか（笑）。山極さんに文章を確認してもらおうだけでも有難いことで、これからのことも考えると勝手なこととはしない方がよい。ただ「これ自体が労作」だからと、どうかしようとしてくれた岸野さんの気持ちが悪かった。今となってはコロナに罹患したお陰で、文章を岸野さんに読んでもらえたし、岸野さんの最後の仕事に携わることが出来、「私にも楽しい作業でした」と言って貰えたことは感慨深い。

2月9日帰郷祭の日の朝、岸野さんからメールが来ていた。「あづみさん（私）以外に感想（文化講演会の）を書いてくれそうな人物が思い浮かばない。4月号までにまだ時間があるし、ちょっと考えて下さい」それが最後のメールになってしまった。岸野さんにしては少し弱気でも、一度断った依頼をもう一押ししてくるあたり、岸野さんらしい。そういうわけで、この文章を書いた。デスク（岸野さん）こんな感じで如何でしょうか？
『良い！文字数もバッチリ。このままでいい』
※関野吉晴さん初監督の映画に関するお知らせが8ページにあるので見てください。

特集 故岸野春子さんを偲んで（続）

大倭の皆様、お世話になった
方々に御礼

静岡県浜松市 西村 友紀

叔母の訃報を聞いた時、私が真っ先に思い出したのは、今年のお正月に叔母から届いた年賀状のことでした。80歳を前に急に足元が頼りなくなり行動範囲が狭くなったが、それなりに楽しく生活していること、そして元旦の地震の事に触れ、「一寸先は分からない。これまで以上に自分の時間を大切にしていきたいと思っています。友紀ちゃんもね、幸福にいつも祈っています。」と記されていました。その言葉が私には何かお別れの挨拶のように感じられて、不安になったのを思い出したのです。今になって思うと、本人にも何か予感のようなものがあつたのかもかもしれません。最後になりましたが、大倭の皆様方をはじめ、生前お世話になった方々に厚く御礼申し上げます。

『とおやまと』出版局デスクへ

あじさい色 中村千久佐

岸野さんに出会って長い年月が経ちますが、私はたくさんのことを学び、印刷に関する文字や言葉、そして校正などを教えてもらいました。本当にありがとうございました。

最後に会ったのは2月9日朝、「おはよう」って手を振りあって挨拶をかわしました。なのに数時間後には会えない人になっているとは思わなかったし、シヨックと言うより言葉が出てこなかったです。

何時も『おおやまと』を発行する事にデスクとして力を注いでくれ、私も校正や入力、テーパーこしなどさせてもらいました。これからの編集部はあれやこれやとんやわんやながら、発行が間に合うように皆が一丸となっていてくれることでしょう。どうぞ見守りお願いします。

筆の誤りも個性

奈良県橿原市 浅井 克明

「編集部員が高齢化して皆アブナイ」との理由で機関紙『おおやまと』制作の手伝いを突然頼まれてから4年経った早春。同紙の編集責任者でありながら編集長と呼ばれるのを嫌がり「私はデスク！」と主張するのが常だった岸野春子さんの急逝。印刷前の紙面を隅々まで校正して返しても、明白な誤記以外、特に手紙の文章は直しませんでしたね。「それも書き手の持ち味」だと。世間が社会的弱者のレットテルを貼る一人一人に寄り添い、十人十色の個性と交わってきた長年の経験。その温かな眼差しを最期まで貫いた編集姿勢だったなど帰幽された今、改めてしみじみ感じます。中立公正な新聞などありえませんが、媒体はすべて編む者の心魂が宿る「現身」なのですから。

まほろし 幻の岸野さん

あじさい邑 矢追 房子

2月9日に法主奥津城でのお参りが終わった後に、私は拝殿に入って一番後の方に座りました。その後、2時頃だったか、岸野さんが大倭印刷の方から拝殿に来られたようで、やはり後の方に座られ、私の方を見てニコッとされました。(言葉は発していませんでしたが…)これが最後とはビックリでした。

岸野さんが印刷所へ行かれる時にいつも通られる

るので、八重垣園の玄関のところでお会いしたのをなつかしく思い出します。今の私の頭はきちんと回転していない感じがしていますが、昔岸野さんから文化行事のお土産にいただいた木製のココロ回るものを愛用しています。

岸野さんの思い出

新潟県佐渡市 大滝 哲也

私はまだ17歳だった1979年4月、当時菅原園の2階におられた岸野さんという方が、手作り苺ジュースを、菅原園の隣の小さなプレハブにいた私に持って来て下さいました。恐る恐る飲んでみたところ、砂糖などが入っていないすっきりした味わいだったので、とても美味しく頂きました。



▲中村昇次さん(右)と岸野春子さん(左)が、2005年あたりから本紙の編集のお手伝いを遠くからさせて頂くようになってからは、メールのやり取りがよくありました。たまたまその最中のことでした。2月9日という日付にも驚きました。そちらでもお元気で！

なんちゃって

千葉県船橋市 遠藤 浩子

私が大倭に繋がることができて30年、年に数回

ですが、春子さんの笑顔を見て優しい声を聞くと、大倭に来た実感がわきました。

一度だけ近鉄奈良駅近くの商店街で、日傘をさして童女のようなたずまいでスピード感をもって歩いている春子さんに出くわしたことがありました。帰幽される前の週に頂いた葉書を紹介します——「生きることが趣味なんちゃって。お元気で」。なんちゃって」が春子さんらしい。2月13日、私をしつかり見ている春子さんのお顔を夢に見て、シャキッと起きました。話らしい話をしたことがなかったけれど、これから事あるごとに話しかけてもらいます。よろしくお願いします。なんちゃって。

門前の小僧として

あじさい邑 青山 法義

健さんが、「岸野さん、原稿書いたんやけど見てくれへん」と頼んでおられ、岸野さんがチェックを終え、「言いたいことはわかるけど、文章は短か目に、かつ端的に。句読点は入れ過ぎない。それと、てにをはの使い方に注意」と話しているのをよく聞いていました。

私も依頼され原稿を書くことがあり、岸野さんにチェックしてもらおうと指摘が多く、何度修正してもOKをもらえませんでした。でも、ある時「のっちゃん文章上手くなつたね、健さんに言ってるのを横で聞いていて覚えたんやね。まるで門前の小僧やね、ふっふふ」。

この言葉は自信になりました。今年の初めにも、寄稿することがあり、チェックをしてもらおうと、「ほぼ言うことなし、ただ、ここは『』の方がいいかな」と。

読み書きのできなかった私が今も大倭印刷で頑張れるのは、門前の小僧をさせてもらえたからと

感謝しています。

岸野さん、ありがとうございます。

岸野さんは今日まで、私にとつて ただ一人の編集者です

兵庫県明石市 水島 照美（てるみん）

なぜか私の一大事の渦中には、いつも偶然原稿依頼。そのタイミングにお互いびつくり。

最後の校正は昨年5・6月号。私の勘違いで二倍量の文章を送ってしまった、さすがの岸野さんも困っていたら、翌月予定の原稿が遅れて、全文2ヶ月連載。かなり迷惑な間違いは逆に感謝されました。校正終了後のメールに、初めて注意点が書き添えられました。

「同じ言葉は、漢字で書くかひらがなで書くか、どちらかに統一する」「は〜い」。

「『』『』の使い方がちよつとユニーク。まあ標準的にする」「は〜い」。そして、メールの締めくくりは「大倭にも歌いに来てね」「は〜い、歌いに行っちゃう！」

包容力抜群

熊本県水俣市 高倉 敦子

今も声が聞こえてくるような気がします。「あつちゃんの写真、何かいいのがあったら送つてー」。時々開いてメールや実物を送ると、ちゃんと表紙になってびつくりでした。

さらに原稿、あの可愛らしい笑顔で何度も声をかけていただったので、ついその気になって書くこと長過ぎる。でもそのまま好きだけいいとおっしゃる。こんな編集者は見たことないし、春子さんがいなくなったら私はなにも書かないままだったかもしれないと思うのです。

そういうえば、送りますと言って間に合わなかつ

た宿題の事、これはいつたいたいどうしたらよいか？ ちよつと路頭に迷っています。

どちらかという辛口な春子さん。見えない世界の事は「私にはよくわからない」とおっしゃって、きつぱり一線を引きながら実は包容力抜群で、その辛抱強さにも脱帽です。

これまで励まして下さりありがとうございます。また会いたいです。

救急車に乗って

奈良市 福田きよ子

菅原園に就職した時の寮母主任が岸野さん。あれから50年近いお付き合いをいただきましたね。金時豆や甘酒を届けると、空いた容器に「ちよつど良い甘さ」、「甘酒は調味料にも使う」、「どの孫ちゃんのお祝い？ お赤飯美味しかった!!」と必ず小さな感想のメモが入っていてとても嬉しかったです。

「救急車に誰か一緒に乗って下さい」という声に「はい、私が行きます」と手を上げました。隊員さんが色々な処置をして下さる横でただオロオロと足をさする事しかできず、病院に着くと別室に。日が暮れかかる頃、ドクターに亡くなった事を告げられた時も、自分の頭が一つ宙に浮いているようでした。

岸野さん、あつぱれ、あまりにもあつぱれです。

感謝です

奈良市 須川 映治

岸野さんには私たち家族も「らんまん」も、とても良くしていただきました。「断捨離だから」とご自宅の家具などを頂いて、今もグループホームの利用者さんに使っていただいています。

以前、仲間と自作詩の朗読会を奈良市の学園前

で開いたときは、岸野さんも来られて自作俳句を朗読していただきました。私も昨年のペースメーカーの植込み後の日々を少しは味わおうと、ネットに投句し始め、良い句が出来たら是非見て下さいと約束していたのですが、それもかなわず、でもこの3月の兼題でサイトの優秀句に選考されました。きつとあなたの後押しがあったのでしよう。岸野さん、ありがとうございます。家族全員で感謝です。

いさぎよさに安心

群馬県安中市（新皇教団） 櫻井 節子

突然に旅立たれた知らせを聞き大変驚きました。法主さんのご命日と同じ日に帰幽されたこと、深い縁を感じます。杉本さんより伝言された岸野さんの声「ミナサン オサラバ」、いさぎよい様子に安心しました。静かで、時おり発するユーモアには場が盛り上がり、忘れられない思い出です。『とおやまと』紙では大変お世話になり、ありがとうございます。霊界人となられても、今後ともよろしくお願いします。

やうばーデスク

大阪府枚方市 林 修三

デスクは逝つてしまった。思えば数々のシーンが甦る。11年間共に過ごした『とおやまと』紙の編集、互いに毎回欠かさなかった「裸会」、日帰りの文化行事への参加も懐かしく、楽しかった。

「なんちゃってー」「それにのつたー」の名文句も、もう聞けない。笑顔は天下一品！ それにしても最後の思い出は帰幽4日前、2月5日の編集会議での子供同士の様な私と岸野さんの口げんか。そしてその翌日、私が教務本庁にいた時、私の顔が見えたからと突然現れ、顔を赤らめ興奮したかの

様に語られたこれからの編集方針。あれは仲直りの、そしてこれからも『おおよまと』紙を頼んだヨの遺言だったのです。本当にありがとうございました。見事な旅立ちに座蒲団三枚！

直球と変化球と

奈良市 岸田 哲

岸野さんと出会ったのは、ぼくがあじさい邑に移り住んだ約50年前のこと。重度障害者施設の菅原園で働きはじめると、そこに寮母主任の岸野さんがいた。すぐに一筋縄ではないかな人物と直感した。彼女は納得できないことがあると、たとえ立場が上の人に対しても、直球で、時には変化球も交えて食いがたつて譲らなかった。

東京の聴覚障害者施設で働く友人が困り果てて連れてきて、法主さんがひと言で引き受けた中村昇次さんの世話を、「哲さんの尻拭き」と皮肉りながらも親身になって最後までやり切った。「昇ちゃん」だけでなく、彼女が何らかの縁を感じた問題を抱えた人たちを見捨てられずに地道に面倒をみる姿には頭が下がった。あまりにもあっさりど霊界に帰っていったので、『おおよまと』の編集部員としては呆然としているところである。

編集の先生

あじさい邑 上本 聡司

岸野さんと一緒に仕事して10年くらい経ちました。その中で毎月発行する『おおよまと』で編集のいろはを教えてもらい、感謝の気持ちでいっぱいです。

今思い返すと、私が新人の頃の岸野さんがまとめた原稿類が最近の物よりもキッチリしており、かなりフォローがあったんだなあと思います。最近では、今月は記事の集まりが良いや悪い等

を話し、とりあえず文字を流してみたって言う会話が前置きのようになり、また校了をもらうときは「校了！何かあればお詫び文書こう！」と笑いながら話したものです。

時々「聡司くん、なんかパソコンの調子が悪いのよ、見てくれない？何か変な所触ったかもしれない」とか「何をしたか分からんけど、ワードの設定が元にもどらないのよ。ちょっと見てくれない？」と相談に連れられ「いいですよ」と答えるのがよくありました。その時にパンやお菓子など色々貰ったのがいい思い出です。

そしてあの日、制作室に岸野さんが来られ声を聞いた瞬間、体調の心配と共に日頃のような覇気が無さ過ぎると感じ、かなり動揺しました。その後の帰幽の知らせを聞き、驚きの反面、以前の体調や日々の過ごし方を聞いていたので、ああだからこの日なのかとも思いました。

岸野さん、多くの思い出がありますがとうございしました。御霊のご平安をお祈りいたします。

岸野さんの仕事

大分県中津市 福田 まや (星庭)

デザイナー・アートディレクター

幼いとき、年賀状の絵は私の担当で、印刷をお願いした大倭印刷へ母に連れられて行くと、入り口の左側に岸野さんの机があって、刷り上がった年賀状を見せてくれたのを覚えています。

少し大きくなり、学校に馴染めなくて、ぶらぶらしていた私は、大倭印刷で見習いをする事になり、初めてデザインや印刷にまつわる仕事に触れることになりました。岸野さんは昔見た同じ机に座って、校正の仕事をしていました。コツコツと文字を読んで間違いを探す、地味だけれどとても重要な仕事です。

その後、デザイナーとして就職し、関西、関東を経て、12年前から大分県の耶馬溪の森の中で、「星庭」というデザイン事務所をしています。時代が変わり、地方だからこそのおもしろい仕事が僻地でもできるようになりました。それはデジタル化のおかげでもあるのですが、反対に印刷について詳しい人は少なくなりました。特に校正の仕事は出番が減り、最近WEBや印刷物でも、文字の間違いがよく見つかるようになってしまいました。でも、まだまだ校正という仕事が、私たちに重要だと思っていて、去年から経験のある方にお願ひして、業務に校正の仕組みを作りました。それは、コツコツと文字を読み、丁寧に赤入れをしている岸野さんの仕事の姿勢から教えてもらったからです。

そんな岸野さんが亡くなってとても悲しいです。原稿について亡くなる2日前にもメールをやりとりしたばかりでした。この原稿の校正をしてもらわないといけないなかったのに……。

耶馬溪には、モトさんと一緒に笹を見にきてくれて、満天の星空と天の川も見ましたね。今年のお正月も交流の家で、岸野さんの持つてきてくれたおせちを囲んで、お正月をお祝いできたの、本当に嬉しかったです。

物知りで、文章をたくさん読んでいて、そして校正という仕事を、ずっと続けていた岸野さん。その姿を見せてくれて、ありがとうございました。私もそのように仕事を続けていきたいです。間に合わなかったけど、きつとどこかで赤入れをしてくれているように思います。最後まで誰かのための仕事をしてくれていた岸野さんだから。

春浅し 楽器背負ひて 下校中 春子

あじさい日誌

3月10日 午後2時から大倭会主催祝会が開かれました。

3月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

3月23日 NPO法人むすびの家・理事長を20年務められた湯浅さんの退任慰労会とF.I.W.C関西委員会のリユニオンが大倭会館で開催され、36名(子ども2名含む)が参加しました。

同じく理事を退任される中島健さんと湯浅さんには花束を贈呈。気仙沼・唐桑から海の幸とお酒が届くなどカンパもあり、にぎやかな会となりました。最後は皆で映画『真田風雲録』の主題歌を合唱しました。

午後2時から大倭大本宮拝殿において月次祭が行われました。この日は昭和45年3月23日の法話をお聞きしました。

3月24日 午後2時から大倭会館で矢追家麻呂さんを祭主に、故岸野春子さんの五十日祭(イトカサイ)が行われました。

お知らせ

4頁で書いた関野さんとの対談から『初監督』という映画が死体の出来たためにファンディング実施中。読取(永坂あづみ)のイラストも掲載されています。



聖歌「くにのもと」が始まって間もなく、突然岸野春子さんの声があり「ワガジンセイニイッペンノ、クイナシ」(我が人生に一片の悔いなし)とのことでした。2月12日の火葬場での岸野さんの声「ミナサン オサラバ」の後がこれ。最後までかっこいい岸野春子さんでした。(ボン)

3月25日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

3月29日 紫陽花邑の桜も咲き始めました。この日が岸野春子さんの正式の五十日祭でした。

昼食時私は一人で岸野さんの霊界送りをしました。この日が正式に岸野さんが大倭の霊界に帰る日だったからです。この時は法主さんは「キシノハシヨウザニツク」(正座につく)と言われました。

次いで岸野さんは「ホウジュサンニ オホメイタダキマシタ」と言われました。霊界で法主さんに会われたとは、すごいことだと思いました。(ボン)

3月30日 午後5時半から大倭会館で大倭町自治会の役員会、6時から総会が開かれました。

3月31日 午後4時ころ神戸市の田路千鶴さんが突然来邑されました。

4月2日 午後5時から本紙『おおやまと』の編集会議が教務本庁で開かれました。

4月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。6時半から大倭会館で邑後の会が開かれました。大倭安宿苑では

3月21日 大倭霊地墓前慰霊祭が午前10時半より邑人慰霊塔前にて実施されました。

(菅原園) 3月27日 午後からフロアでホワイトデー企画として、チーズフォンデュを楽しんでいただきました。

4月5日 天気も良く、桜も満開に近いくらいで、お花見散歩を午後から行いました。

3月10日 3月14日に行われる卓球大会の予選を行いました。

3月14日 卓球大会の決勝戦を行いました。見学に来ていた方も大きな声で応援し、楽しい時間を過ごしました。

3月21日 希望食事会で、お寿司・ピザ・中華料理・うどん等、自分の好きな食べ物を注文し食べていただきました。

3月26日 音楽療法があり、童謡や歌謡曲等、ピアノに合わせて歌いました。

(長曾根寮) 3月3・14日(特養)フロアでひな祭りの飾りつけや絵を飾り、ご利用者・職員一緒にひな祭りの歌を歌いました。

3月21・22日(デイ)作品づくりで桜の壁掛け飾りを皆さんと一緒に作成しました。

第350回大倭会文化行事

京都東山八坂塔(法観寺)に木曾義仲の首塚を訪ねて～京都清水界隈散策～

日にち 令和6年6月16日(日)雨天決行
集合 京阪電車 清水五条駅
交通 駅改札口(1ヶ所のみ)に午前10時半
近鉄学園前9:29発近鉄奈良線奈良行(快速急行)⇒大和西大寺9:33着、9:39発近鉄京都線京都行(急行)に乗り換え⇒近鉄丹波橋駅10:09着、10:14発京阪本線出町柳行(準急)に乗り換え⇒清水五条駅10:30着
行程 清水五条駅～(徒歩10分)～六道の辻～(徒歩15分)～法観寺(八坂塔)～(徒歩10分)～清水寺
※昼食はお店で
連絡 林 修三 080-2527-0840

予告 第351回 10月20日(日)・21日(月)
木曾福島・飛騨高山・永平寺への旅 定員27名

(茂毛路園) 3月14日 ホワイトデーでおやつ時にクッキーが用意され、男性職員から入居者へ手渡して、ホワイトデーの雰囲気味わっていただきました。

4月1日 茂毛路園創立16周年記念日で、昼食には豪華な食事(創作料理)が提供されお祝いしました。

(八重垣園) 4月2日 桜を見に紫陽花邑内を散歩しました。満開ではありませんでしたが、皆さん喜んでおられました。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 5月6日(月・休) 午後2時から大倭神宮にて。
*大倭会主催祝会 5月12日(日) 午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮) 5月15日(水) 午後2時から大倭神宮にて。
*月次祭(大倭大本宮) 5月23日(木) 午後2時から大倭大本宮にて。

お詫びと訂正

本紙前号(3月号)1頁1行目で講師の山極壽一氏の名前を「山際」と誤記してしまいました。お詫びをするとともに訂正いたします。(編集部)